

## 平和を望む吸血鬼

鳴り響くベルの音に、男は不快気に眉をひそめてベッドから手を伸ばし、手探りでソレを探し当て苛立ち紛れに硬く握った拳を振り下ろす。

「あ、やば……またやつちまったか……」

パキヤリと嫌な音を立てて目覚まし時計が文字通り『潰れる』。普段の生活の中での力加減は身についているものの、寝ぼけているとすぐコレだ。

「吸血鬼用の商品なんて売られないもんな……脆すぎて困る」

グチグチと文句を垂れながら、男は凝り固まっていた体を思い切り伸ばして残る眠気を追い払い、ベッドから降りてリビングへ向かった。

「……あー、そういうや血液パック切らしてたんだっけ？」

テレビを付けてニュース番組にチャンネルを合わせた後、喉にヒリつくような渇きと空腹感を覚えた男は、冷蔵庫の中身をあさった後、面倒臭そうにそうこぼす。そもそも一回に飲む量が多いのだから、大量に買っていても、すぐに尽きてしまうのは仕方ない事なのかもしれない。

もちろん、ただの趣味や趣向、味の好みで血液なんてモノを飲んでいるわけではない。吸血鬼病……少し前に世界中で爆発的に流行った、ほとんど呪いとも言える伝染病が原因だ。

他人の血液を一定量以上摂取しない限り、喉の渇きと飢餓感が治まらなくなる奇病。長期間摂取を拒み続けると、渇きと飢餓感に精神が犯され、限界に達すると自分の意志に関係なく、人を襲い直接血液を奪って渇きを癒すのだ。幸運な点は同じ病の持ち主の血液でも、衝動が治まる所だろうか？

兆候は簡単にわかる。目の色に赤みが差ってきて、陽の光が何時もより眩しく感じ始めたら、それはすでに感染している証拠だ。

その内、何を飲んでも喉の渇きが治まらないようになり、何を食べても満たされないようになる。最後には陽の光を浴びるだけで焼けるような痛みが肌に奔るようになり、直接太陽を見なくても網膜が焼かれる不都合な体になるのだ。

利点は夜目がやたらと効くようになるのと、身体能力の向上くらいのものだろうか？伝説上の吸血鬼（今は伝説上でも何でもない、そこら中に居る）と全く違うから吸血鬼病。酷いネーミングだ。

治療法は現在発見されていない、それどころか原因すら見つかっていない。それがこの病が呪いと言われる所以、医学的には何の問題も無いのに、他人の血液を飲まずにいると発狂し、死に至る最高に最低な伝染病だ。

「それにしても、また殺しか……」

ニユースアナウンサーが淡々とした調子で殺人の報道を流しているのを見て顔を顰める。報道されているのは、『ヴァンパイアハンター』と名乗る者達。正義やら救済やらを掲げて吸血鬼を虐殺する掃除屋だ。

「人類の歴史を省みたら仕方無い事かもしれないんだけどね……」

相手から見たら、既に患者は人間などではない、ただの化け物でしかないのだから。それもゾンビと同じかそれ以上に性質の悪い知性を持った化け物、歓迎できるはずもない。

「さて、オレも我慢出来なくなる前に飲まわらないとな……」

無論、何の理由もなく発生したわけではない。血液を貰えるだけの金が無かった吸血鬼は人から奪うしかない。そしてソレが数え切れない程に居た。だからこそ、『ヴァンパイアハンター』が生まれた。

「救いのない話だね全く……神は死んだ！ ってか？」

元々彼等はただの一般人だった。爆発的に流行した際に、渴きで暴走した吸血鬼に親族・恋人が噛まれた者、噛みどころが悪くて殺された者。そんな者達がほとんどだ。

欧州方面ではこの傾向が更に酷く、魔女裁判ならぬ吸血鬼裁判が『善意』の民衆の手によって開かれる事が頻繁にある。とネットで囁かれている。

男はそれをとんだ皮肉もあるものだ、と思った。ヴァンパイアより人間の方が流血を好み、世界中で血の雨を降らしているのだから。それを皮肉と言わずして何と言うのだろうか？

「フン……」

気に入らないと言わんが如く鼻を鳴らすと、男は玄関のドアを開けて出ていった。

「ご馳走様」

男がそう言っつて、抱きしめていた女性から手を放すと、少女は何の抵抗もしないままアスファルトの上に崩れるように倒れこんだ。その顔は恐怖に歪んだまま固まってしまっている。

「なに、大丈夫。死にはしない、吸血鬼となった今、その程度じゃ死ねない」

気を失い、最早少女には聞こえていないのを承知の上で、男は平然とした調子を崩すことなく言葉を投げかける。

少女から流れ出し、アスファルトに広がっていく紅い液体が歩道に落ちている薄いピンク色の花びらを同じ色に染める。

「そう言えば桜の木の下に死体が埋められているっていう迷信があつたっけ？」

確か、それで血を吸っているから花びらがピンク色なんだとか……。と男は鮮やかに染められていく花びらを見て、何処かで聞いたか読んだかしたものを思い出す。

「そう考えると、桜もオレ達の仲間ってことになるな！」

飢えと渴きが癒えた男は機嫌が良さそうに、傍に植えられていた桜の木の本を見上げて大きく頷く。

「これで目標にまた一歩前進か、先は長いな……」

人間に『ヴァンパイアハンター』が居るのと同じように、吸血鬼にもその対極に当たる者達は存在する。

ソレらにとって血液パックはただの一時しのぎにしか過ぎない。パックからではなく、人間から血液を直接奪って感染者を増やすのだ。

「中途半端に二つに分かれてるから無駄な争いなんて起こるんだよ。皆一つになれば争いなんて起きない！ 君もそう思わないかな？」

男は倒れ伏した少女に、にこやかに笑いかけ、まるで多数を相手に演説をするように語る。

ソレらは伝説の吸血鬼の如く、若い少女を主に狙う。理由はトンビが鷹を産む事が無いように、吸血鬼の子は同じく吸血鬼としてこの世に生を受けるからだ。

「皆同じになれば、種族の違いなんて下らない理由で人殺しなんて起きない！ 薬が出来たなら、ソレを飲んで人間に戻ればいい！」

ソレらの目的はただ一つ「世界平和」という、叶う可能性など方に一すら在る事の無い夢物語。人々はその狂人達の事を畏怖と憎悪を込めて、こう呼称する『ドラキュラ』と。

「それでは、お嬢さん。良い夜を……」

男はそう言って少女に対して綺麗に一礼すると、踵を返して暗い夜道を進んでいく。

「何時の日か、世に平穩のあらん事を」

男は最後に、誰かに語りかけるわけでもなく、そう小さく呟くと、路地へと曲がり光の無い闇の中へと消えていった。